



丸火自然公園とは……

この公園は、自然を生かし市民の保健とレクリエーションの場とするために、昭和45年から整備を進め、現在ほとんどできあがっています。

公園内には、丸火自然館、広場、キャンプ場、遊歩道万葉植物園のほか、少年自然の家もあります。また、公園内や山ろくを見わたせる展望台もあります。

丸尾……の意味は明らかではありませんが、昔、この溶岩流の上を馬が歩くとよく転(ころ)ぶので、そのことを地元の人たちは、「転(まろ)ぶ」とか、「転(まろ)び」といっていたようです。このことばがなまり「丸尾(まるび)」、と名づけられたともいわれています。

丸火自然公園に使われている「丸火(まるび)の字句は地名の「丸火」をそのままとって、名づけられたものです。

おいたち

富士火山の南斜面のほぼ中央部に、細長くちょうど、「長グツ」のような形をした溶岩流があります。これが大淵丸尾溶岩流(おおぶちまるびようがんりゅう)です。

今から約1,750年前、新富士火山の寄生火山である大淵丸尾が噴火してできたものです。この噴火は、はげしいものではありませんでしたが、高温のカンラン石玄武岩を大量に流しました。

このとき流れた溶岩によるガラガラした地形が、噴火口から今宮の浅間神社付近まで、約9キロも続いています。

富士山ろくで、新富士火山のガラガラした溶岩が、むきだしになっている溶岩流のことを「丸尾(まるび)」と呼んでいます。富士火山には、大淵丸尾のほかに、十里木丸尾、青木ヶ原丸尾、剣(けん)丸尾、鷹(たか)丸尾など、40をこえる丸尾溶岩流があります。

丸火公園の樹木

丸火自然公園の雑木林は、専門的には「二次林(にじりん)」と呼ばれているものです。

二次林とは、自然にできあがった一次的な自然林が破かいされたあとに、二次的にできた自然林のことをいいます。

また、丸尾溶岩流のできた時期から考えますと、この

公園にも、もっと大木(たいぼく)があってもいいことになります。しかし、現在公園内で見られる樹木の大きさは、せいぜい10メートルくらいで、樹令も20年から30年くらいしかたっていないものばかりです。

それから、もう一つの考えられることは、このあたりの気候ですと、自然にはえるのにまかせておくと、照葉樹(しょうようじゅ)と呼ばれる幅の広い葉をつけた常緑樹(じょうりよくじゅ)が茂っています。

そのわけは、次回の「なりたち」のところで説明することにしましょう。



【展望台からの富士山
手前の二次林が大淵丸尾溶岩流】

丸火自然公園にはいると、季節によってホオジロ、カッコウ、サンコウチョウ、カケス、ツグミ……など、いろいろな野鳥のさえずりが聞えてきます。

公園は、標高400メートルから600メートルの間で、二次林の豊かな植物に恵まれています。最近では、野生の動物にとってかせない水場もでき、エサ、住い、水と、三拍子がととのえられるなど、野鳥や獣(けもの)の保護がはかられてきています。

表紙のことば

新総合計画が真に市民のものとして理解され、新しいまちづくりを共に話し合うための地域ごとの懇談会が6月1日に、吉原地区をスタートしました。当日は吉原市民会館に町内会長さんをはじめ、役員さんなど170名が集り、市長の挨拶にはじまり、新総合計画の概要説明を参加者は熱心に聴き入り、その後、懇談に入りましたが、大変活潑な意見が出されました。

特に市の中心街らしく、商業者から吉原商店街のこれからのあり方など強く意見が出され注目されました。

これらの意見は、今後市政をすすめていく上で大いに参考にさせていただきます。